丹後二俣和紙

丹後二俣紙は、かつて丹後国の一部である二俣地域で生産されている和紙です。12 世紀末頃に紙作りの技術が導入され、やがてこの地域は主要な和紙生産地となりました。農民は冬の間に副業として製紙を始め、この地域は周囲の大江山に住む伝説の鬼を引き合いに出して、非常に強いという意味の鬼障子紙で知られていました。紙の需要は衰退し、今では二俣の製紙業者は一つしかありません。

田中製紙工業所は代々続く家業として、楮の栽培をはじめ、伝統の製法で製紙しています。和紙は三椏や雁皮からも製造できますが、田中家は楮を使います。二俣の気候は、非常に丈夫で洗練された製品を生み出す、繊維の短い楮を生産するのに適しています。彼らは書道用紙や様々な色や質感の和紙を作り出しています。さらに、田中家は、この地域のもう一つの伝統的な製品である漆から不純物を濾過するための非常に薄い紙を作る技術を編み出しています。彼らの紙は、国の文化財の補修にも使用されています。

田中製紙工業所に隣接する大江町和紙伝承館には、土産物屋や、製紙技術や和紙を使った芸術品に関する様々な展示があります。10 名以上のグループの場合、紙漉き体験への参加予約ができます。